

神殺しとヒーローアカデミア

ハーメルン大好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

回道キリアは転生者である。

だが、前世の記憶も人格も引き継がれはしなかった。

ただ、前世の常識のみ無意識の内に内包してしまった。

転生先は、個性なる異能が当たり前になった世界。

その個性を利用して犯罪を犯す『敵』と呼ばれる存在がいて、更にはそれを捕まえる『英雄』がいた。

キリアは何とか個性という異能までは受け入れられたが、『敵』と『英雄』の存在までは受け入れられなかった。

曰く

「『敵』とか『英雄』だなんて、漫画やゲームじゃあるまいし……」

そこで、彼女は『敵』も『英雄』もない国で暮らそうと考え努力した。

努力の途中で彼女は家族旅行で海外に行った。そこで出会った、『個性』よりファンタジーでより神秘的な存在『まつろわぬ神』に、そして自身が『敵』や『英雄』よりも理不尽と不条理の塊になった。

作者はカンピオーネ！にわかです。

ヒロアカは漫画のみ履修しております。

目次

新たな神殺しの誕生	1
ようやく、この世界に産まれる事ができた。	5

新たな神殺しの誕生

「さあ御二柱^{おふたかた}、新世代の新たな神殺し、新たな我が子に祝福と憎悪の言霊を頂戴」

その声の主人は、少女のような可憐でいて女の艶やかさを、思わさるものを同時に内包していた。

妖艶と可憐、を両立させる少女は唄う、新たな、神殺しの生誕を祝して。

そこはとある山中、阿鼻叫喚の地獄と化した地。木々は燃え鳥や獣は死に絶えた場所、その場に居たのは三柱の神と一人の人間だった。そのうち五体満足立っていたのは神殺しの後援者と呼ばれるパンドラのみだ。

「うむ、よかろう。小娘^{わっぱ}よ童の身でありながらよくぞ我等を殺してくれた。我等の戦に横槍をいれたのは許せぬが、その戦が小娘を害したのもまた事実、殺されても文句は言わぬ。しばしの間、権能^そは預けておくゆえ、我か我に連なる化身以外には決して敗北は許さぬ。再戦の時まで壮健であれ！今この時より貴様はこやつと同じ我が宿敵よ！」

皮膚と髪が茶褐色の偉丈夫は、死に体にもかかわらず声高にそう叫ぶ。

「ハハ！痛快である。横槍の上の漁夫の利とは言えよくぞ只人の身で、我等を殺してくれた！権能^そを我が身から奪いし貴様はこれより我が養娘よ。故にそのそ奴とそれに連なる者達に決して負けるな！そして次は我か我と連なる化身と堂々と雌雄を決しようではないか！」

金髪と三つの目、複腕の異形でありながら美しい男は慈しみを含んだ声でそう告げる。

「痛い？苦しい？でも今は甘んじて受け入れなさいな、その痛みはあなたを最強の高みへと導くわ！でも、その殆ど消し炭みたいになつても生きているなんて私もびっくりよ、今の時代の子達の事は詳しく

はしらないのだけど、随分と生命力が強いよね」

「全くだ、我が雷の力が込められた武器を人の身で拾い上げコヤツにぶつけた時は、我が目を疑ったぞ」

「うむ、コヤツと同意見なのは癪に障るが、同意せざる得ない。我が日輪の光輝を込めた矢を拾い上げコヤツに投げたときは驚いたぞ」

「つまりこの娘は、御二方の武器に込められた雷光と日光に焼かれて焦げ炭になってしまったのね。全くそんな状態で動けるだけでも驚愕ものだけど、きつちりとヤルなんて流石は私の養娘！」

この時の私の意識は殆ど無かった、彼等の力で体を殆ど炭化させられていたのもあって痛みも殆ど感じなかった、だが……超常の存在に睨みをきかせ、無理やり口を動かした。

「つ…………ぎ…………は…………ま…………け…………な…………い…………」

勿論、次なんてあるとは思っていなかった。これで自分は死ぬのだと確信していた、だけどそれでも、彼等に弱い姿をただで晒したままでいるのが嫌だった、正直自分がここまで負けず嫌いだっただけは我が事ながら意外ではあったが、それでも無ければあの理不尽と不条理の権化に挑まなかつただろう。

これは私事、回道キリアが初めて神殺しの偉業を成した時の物だ。

当時の私は、周囲の人々から見たら極々普通の少女だったのだろうが、実際には違った、私が私であるという自我を持った幼少の頃、周囲の人々と相いれない価値観のズレがあった。何故、現代の極々普通である両親が、客観的に見て普通の教育を施していたにも、関わらず、私がそうなったのかは今現在も不明だ。

価値観がまるで異なっていた。

個性と言う名の異能が人類の凡そ8割が有しているという事態にも、受け入れるのに時間が掛かったのに……

なんと、ヒーローという職業があった、なんでも個性を悪用する者を敵と呼びそれを個性を用いて捕まえる人達をヒーローと呼ぶらしい。

幼児のころ周囲の友達がヒーロー談義をしている中、なんとか輪から漏れないように話題を集め、誰かが好きだのと話をしながら思った。自分は周囲とズレている、みんながヒーローが好きだ、ヒーローに成りたいと言うなか、私は表情に出さず、でもどこか冷めた目でそれを見ていた。

ヒーロー・サイン
英雄と敵だなんてアホかと、若者やいい歳した中老年の大人が自らを英雄と謳い、コスプレをして日々暴れまわっていた。その光景が日常の直ぐそこにあり、私は思った、この国は長くないなど。漫画やアニメの世界でもあるまいし何十年もヒーローごっこを続け、敵が増え続ける現状をなんとかしようもせず英雄を増やすことで対応し、国民は喜んで受け入れている。

それを永遠と繰り返し日常と化しているのが今の日本だ。どう言う訳か私はそれを受け入れられず、英雄や敵の居ない国に将来住もうと海外の情勢を調べると、英雄や敵といった呼称をする国は日本と米国だけな様だ。勿論、個性絡みの事件や事故は有るが、それに対応するのは警察や消防のようで極々普通だ、やったね！

そう言った訳で、幼少の頃から親に頼んで英語・中国語・ドイツ語を勉強させて貰った。

私が、海外に興味があると思われたからか、親が海外旅行を企画してくれた。

企画してくれたのは普通に嬉しいのだけど、何故タイ？ああ……：ツアーが、安かったのね。

だけど、その旅行は両親と普通の生活との永遠の別れとなった。

事は突然に起こった。

観光バスに揺られていると唐突に天候が変わった。

稲光と太陽の光が激しく光る、まさに異常気象だ。

それを起こしたのは巨大な身体を持つ存在だ。

それは英雄でも敵でも無かった。

そういう枠に納める事が出来ないかと本能で悟った、超越者や神、人ではどうしようもない災害である。

二柱の神が争っていた、その余波で容易く私達の乗っていた観光バ

スは破壊された。

私が生き残ったのは偶然、超回復という良個性を持っていたおかげである。

私以外の誰も生き残りは居なかった。両親も回復系の個性の持ち主だけど、性能が低かったからか即死したからか死んでしまった。

他の乗客も生き残っている人は私以外、誰一人として居なかった。

そして、この光景を造りだした二柱の神はこちらに気にもせず相も変わらず争っていた。

それを見た時、私の中でナニカが切れた。その後の事は正直、殆ど憶えていない。

どういう訳か、生き残ってしまった。しかもボロボロだったはずの身体は綺麗に治っている、気を失っている間に個性が発動したのだろうか？

色々考えて、何となく周囲を見渡すと、どういう訳か現地人？の方々が五体投地していた、しかも10人20人じゃ足りない位沢山の人がだ。

……本当に、どういう訳!?

ようやく、この世界に産まれる事ができた。

目が覚めると、周囲は五体投地をしている、10や20人では足りない位の人数の現地人と思われる方々がいた。土下座では無く、五体投地である、私の知識が確かなら仏教で最も丁寧な礼の作法であり、相手への帰依を表すものだったはずだ。

それを、10歳の小娘に、見るからに高僧と思える方もちらほらと混ざって、行っている。私は混乱した！

必死に旅行前に覚えた拙いタイ語と身振り手振りで、起きてくださいと伝える。

すると彼等は、恐る恐るゆつくりと立ち上がった。

その中でも特に貫禄のある老僧が言葉を発する。

「この度は、新たな羅刹王のご誕生、我等一同お慶び申し上げます」
このご老人、私の事を見つめながら羅刹王とかいう物騒な単語を出してきた。それともう一つ気になる事がある、私はタイ語は簡単な単語と定型文しか出来なかった、聞き取りとなると相手側がゆつくり喋ってくれないと聞き取れない程度だった。

だけど、今はハッキリと相手の言語が理解できるし、自覚した今喋る事も問題ないだろう。

これは何だろう？身体の気だるさと痛みから、信じがたいけど先の神話のような戦いが現実だとして、それに私が巻き込まれて、死にかけて、私の個性『超回復』が発動して現在に至る感じかな？

それにしたって、死の淵から覚醒して言語理解能力が高まったって？……無い、どんな少年漫画だというのだ、それに覚醒して得たのが言語理解能力とはこれ如何に？普通、こういったパターンでは戦闘能力向上がお約束だろうに。

まあ、それはそれとして、こんな不思議事象の詳細は、未だに畏敬と恐怖入り混じった、感情を私に向ける彼等に聞けば分かるかな？

そんな訳で、未だ戦々恐々とした感情を向ける彼等に聞いてみるか。

Q. 羅刹王って何？何でそんな物騒な呼称をこんな小娘にしているの？

A. まつろわぬ神を殺した者が女神パンドラの大呪法によって、まつろわぬ神を生贄に転生した存在。羅刹王、他にもエピメテウスの落とし子、愚者の申し子、ラクシャータ、墮天使、デイモン、混沌王、カンピオーネ、魔王、羅刹王、神殺し、魔術師の王等、様々な呼び名がある。

羅刹王となった者は、殺した神から権能を篡奪し、それを振るう事ができる。

野生の獣じみた直観力、人間離れた生命力と回復力、並外れた暗視力、骨格は大抵の金属より強固になり、筋肉はしなやかに千切れ難い。並みの魔術師の数百倍の呪力を持ち、心身共に直接影響を与える呪術や魔術は一つの例外を除いて一切通じなくなる。

更には、千の言語と呼ばれる魔術を自動的に習得し、他言語を短時間で習得できるようになる。

Q. まつろわぬ神って何？ただ単に神という呼称ではダメなのかな？

A. まつろわぬ神とは、人々が紡いだ神話或いは不死の領域から出てきた神々で現世に現れたさいに歪み、その在り方を変えてしまう。そうなった彼等はまさに、服を着た天変地異、自然災害が人格を持った存在であって真なる神とは異なった存在だ。

Q. 貴方方は何故、こんな小娘を恐れ敬う態度をとる？

A. 神殺しは何をしても許される。そこに例外など無く、戯れに人を殺したところでそれを咎めることは出来ない。その際に神殺しが負う義務は、まつろわぬ神が現れた時、人類を代表して戦う事。

神殺しは往々にして破天荒、唯我独尊の気質が強く、下手な対応をしてどの様に爆発するかがわからないから、皆恐れている。

話を聞けば聞くほどに、私の足場がガラリガラリと崩れていく音が聞こえてくる気がする。

何なのこれは！どうすればいいの!?

この世の理不尽を体験し、目が覚めたら自分が理不尽の側になつていた。

(気張つても仕方ないよ、所詮この世は非現実が跋扈する地獄)

だ、誰!?

(俺?俺は、あなたがストレスを限界まで溜め込んで聞こえ出した幻聴よ)

へ?幻聴が自身を幻聴と自称する、何か可笑しくない?

(何も可笑しくもないとも、あなたはこれまでよく耐えた。生まれながらに周囲と異なる価値観を持ち、生来の賢しさと周囲と合わせてきた。それも、もう限界。弾けていいんだよ。我慢しなくてもいい。あなたは、生まれてからずっとずっと溜め込みすぎて俺みたいな声を聴いてしまう。この世が理不尽?不条理?いいじゃないかいじゃないか、楽しい、嬉しい。理不尽も不条理も目一杯愉しもうじやないか。堅苦しい思いも、小賢しい思考も彼方に放り投げて、気楽になりましょう)

その幻聴を聞き確かにそうだと思った。

親や周りの大人達が楽しそうだった。

周囲の子達が楽しそうだった。

英雄達や敵が楽しそうだった。

私も、そちら側に入りたかった。

でも、私の中にある常識ナニカがそれを阻んでいた。

だけど、今は違う。私の中の常識は今まで以上にぶち壊されてしまった。

嬉しいなあ。

羅刹王?魔王?いいじゃないか、とつても楽しそう。

漸く、この世界に馴染めそうだ。

折角、今なら心から笑えそうなのに、魅両せたい相手親はもういない。ならば仕方ない。日本にはあまり心残りは無いし。

外国をゆつくりと観て回ろう。

ああ!世界はこんなにも明るく輝いている。